

東京・青山学院構内遺跡

あおやまぐいんこうない

- 1 所在地 東京都渋谷区渋谷四丁目
- 2 調査期間 一九九一年(平3)十一月～一九九二年五月
- 3 発掘機関 青山学院構内遺跡調査室
- 4 調査担当者 池田 治・中川 泰
- 5 遺跡の種類 近世大名屋敷跡
- 6 遺跡の年代 江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地点は学校法人青山学院の構内にあり、法人施設の増改築工事に先立って発掘調査が行なわれた。調査面積は約一〇〇〇㎡である。



(東京西南部)

青山学院の構内は、一七世紀代には旗本の屋敷地であったが、元禄八年(一六九五)以降明治維新まで、紀州徳川家の分家である伊予西條藩松平家の上屋敷となっていた。明治維新後は一八八一年まで開拓使の第一

官園として使われ、一八八三年より現在の青山学院の所有となった。発見された遺構は、土坑、地下室、井戸、区画施設、道路、排水溝、池、水路などであり、一八世紀代以前に遡るものから明治以降のものまであるが、主に江戸時代後期から幕末・明治初頭の遺構が中心である。

敷地内は、地形的には台地上の部分と低地部分とに分けられ、調査地点は低地部分にあたる。一八世紀代の遺構には、池とそれに取付く水路の他は土坑が数基あるだけで、庭園空間として使われていたようである。一九世紀に入ると遺構の数は急激に増え、板塀などの区画、井戸、地下室、土坑(ゴミ穴)、道路などの生活施設や、これらと庭園空間を区画する土塀状の施設が造られるようになる。これらの遺構は、台地部分に位置すると思われる御殿空間に対して詰人空間と位置づけられる。

遺物は、土器、陶磁器、瓦、金属製品などとともに木製品も多く出土している。磁器には「南紀男山」銘の椀があり、紀州徳川家とのつながりが窺える。木製品には漆椀、下駄、桶、樽、曲物、折敷などがある。これらの中には墨書の認められるものが四点あり、いずれも幕末～明治初期の遺構から出土した。木製品以外の墨書資料として、「西卯」と記された陶器の餌猪口が一点ある。

木簡は四点出土している。(1)と(2)はD五六号遺構(井戸)から、(3)と(4)はD八九号遺構(地下室転用のゴミ廃棄坑)から出土した。

8 木簡の釈文・内容

(1) 〔西條上田〕^{〔久八郎カ〕}
251×43×7 011

(2) 〔 〕
163×54×6 061

(3) 〔昆布〕

納。豆

〔 〕
143×厚6 061

(4) 〔 〕
138×厚4 061

(1)は〇一型式で、下半分の左側は欠損し、下端右寄りには切り込み状の欠損があるが、意図的なものではない。上部中央に方形の小孔が穿たれている。五文字目は「又」の可能性もあるが最終画の形から「久」、七文字目はわずかに見える偏の一部と旁から「郎」と判読できる。西條藩邸内にありながら「西條」と書かれている点は、用途を推察する上で注意を要する。(2)は桶の側板で、外面の上下に箍の痕がある。墨書は不明瞭で判読不能。文字ではないかもしれない。(3)は曲物蓋で下部を欠損する。中央に把手用の小孔がある。一行目と二行目は筆が異なる。三行目は判読不能である。(4)は曲物蓋で半分ほど欠損する。中央に把手用の小孔がある。墨書は欠損に

より判読できない。方向、字数とも不確実である。

9 関係文献

青山学院構内遺跡調査委員会『青山学院構内遺跡（青学会館増築地点）—伊予西條藩松平家上屋敷跡の調査—』（一九九四年）

池田治「伊予西條藩松平家上屋敷跡の発掘調査」（『考古学ジャーナル』三五六 一九九三年）（池田 治）



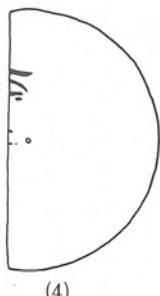
(1)



(2)



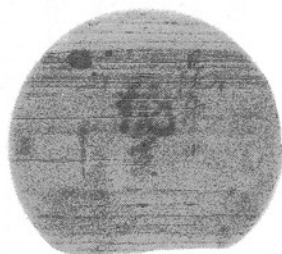
(3)



(4)



(1)



(3)

S=1/4